

みどりの停留所 展

大枝アートプロジェクト [大枝 04]

2008/7/18-7/21

京都芸大が位置する京都市の西の端、大枝大原野地区には、西山の裾野に広がる美しい里山の風景が残っている。

その地域が2000年代に入り、高速道路建設によって急激に変貌をとげつつあった。そこでの「ひと・もの・こと」のありさまをさまざまに記録・表現していくこと——この試みが2004年度の美術学部造形計画の授業から始まり、まもなくアサヒ・アートフェスティバルや京都市地域力再生支援事業などの助成を得て、**大枝アートプロジェクト**として毎年開催した。



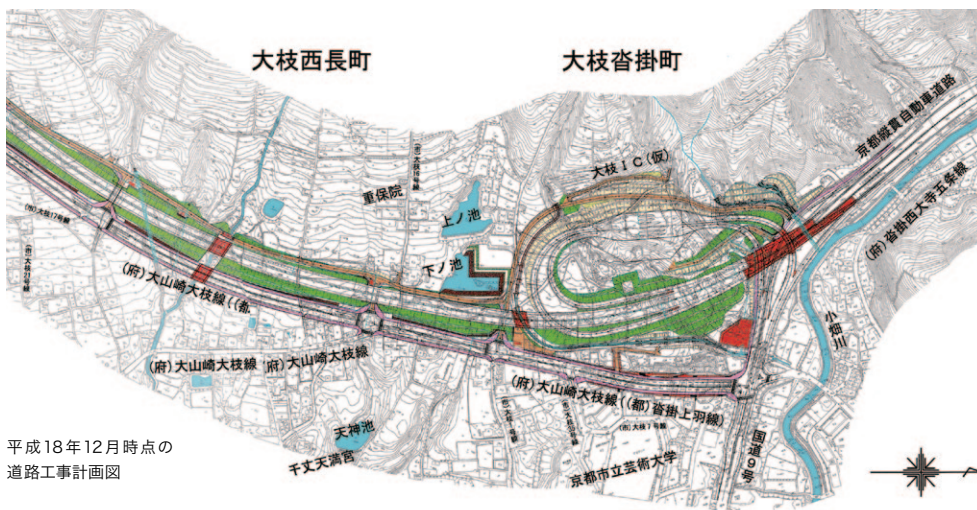
九社神社の参道入口の大藪家土塀。高速道路建設に伴って母屋ともども壊されることになった。これがつちのいへの出発点になる。

大枝アートプロジェクトには、美術学部・音楽学部の学生に加え、地元住民や地域で活動する美術家やフランス人アーティストも参加し、土蔵改装、展覧会、野外音楽会、シンポジウム、ワークショップや出版などを展開した。

高速道路ができるともはやそこに人は立ち止まることができなくなる。2008年の「みどりの停留所」展は、この地域で立ち止まりたいと思った場所を「停留所」として設定し、人と人、人と風景がしばし対話する場をつくることをコンセプトにして開催した。大枝沓掛町～大原野北春日町に仮設された「停留所」は18を数えた。



大枝アートプロジェクトの拠点となった「大枝土蔵」



平成18年12月時点の
道路工事計画図

各地の工事現場を次々と移動するみどりの停留所



さまざまな「停留所」



高橋みはる「眺めるために」



山口哲史「大地の椅子」



中岡庸子「大枝草むすび」

和泉千鶴・高下明彦
依々木麻子
藤元美穂
宇田 茜
飯村理菜
茗荷森平
前田深月
廣有利佳
藤元秀俊
志藤朝真
中尾善那
山口哲史
高橋みはる
中岡庸子
浅野真一
藤原麻子
ジェラルド
井上明彦

大枝04
みどりの停留所展

7.18(金)~21(月)

Os Art Project 2018 Green Steps
http://os.artproject.jp

「みどりの停留所」展ポスター

峠の茶屋計画

「みどりの停留所」展に井上明彦も参加。道路建設に伴って壊された民家の廃材で、大藪家の土塀の延長を提案する「峠の茶屋」を、大藪家の駐車場の一角に即興的に制作した。

屋根テラスからは峠の風景を展望できる。

この街道は昔、大山崎から丹波へ荷物を運ぶ牛馬が行き交い、付近には一休みするための茶屋があったという。大藪家は江戸時代からこの地にあり、九社神社の参道と大山崎街道の出会いに土塀があった。

道路建設のため、大藪家も取り壊し対象になっていた。



かつての大藪家土塀(黄色の部分)。向いの松尾家アルバムから



出品者の一人・佐々木綾子作の巨大鉛筆で「土塀延長」と大書し、茶屋の天井に貼った。



1986年の地図から。赤丸印が大藪家。大山崎街道(柿街道)は九社神社参道前を通り、小畑川を渡って旧山陰道と交わる。

大枝工作隊

2008年8～9月

井上明彦

富元秀俊（日本画3）

山口哲文（彫刻3）

中岡庸子（漆工3）

堀内航（構想設計3）

上坂秀昭（日本画3）

*学年は当時

「峠の茶屋計画」はその土塀の延長を提案するものだったが、「みどりの停留所」展後ただちに撤去した。

ところが大藪さんから「もう撤去するのか」と惜しまれ、また展覧会に参加した学生たちの希望もあって、**大枝工作隊**というチームを立ち上げ、8月から新たな「峠の茶屋」制作に着手した。

同じ駐車場をそのまま作業に使わせていただき、授業でも展覧会のための制作でもなく、ひたすら土や廃材と対話する試みに取り組んだ。



大藪家土塀。漆喰仕上げもなく、練った土団子を積み上げた素朴な風情。阪神大震災にも耐えた。



制作の基本方針

地域では高速道路建設工事のため、次々と民家や竹林がこわされ、廃材や竹材は機会しだいで容易に入手できた。その状況をふまえ、次の方針を立てた。

- ・原則として主材料は買わないこと
- ・地域から出た廃材を利用すること
- ・土壁にも地域の土を入手して用いること





主材料はすべてこの地域から得ること。
土は、旧山陰道の工事現場で分けてもらう。
藁は、大藪家の田からいただく。
柱や梁などの構造材は、取り壊された民家の
廃材、大原野の大工・大五さんから提供
を受けた大原野神社の敷居、イチョウの木
を用いる。
石は、解体中の近所の家からいただく。
竹木舞に使う竹も、建設工事で壊された竹
林からいただく。
材料を「買わない」ことで必要になるのは、
材料へのアクセスや知見を持つ人々とのネッ
トワークであり、材料を使いこなす知恵と技
術であり、さらに地域社会の成り立ちとそれ
を包む自然環境を知ることだとわかった。

峠の茶屋



2008年10月から峠の茶
屋制作は、自由テーマ研究
という授業になり、新たな
学生も参加もした。

土壁づくりに必要なのは何
よりも土だった。
旧山陰道に沿った竹林の
法面が道路拡張で壊され
ており、処分される赤土を
無償でいただくことがで
きた。しかも1トンの土嚢を4
袋、学内まで運んで下さ
った(2008年10月9日)。



切藁と捏ね合わせ、土塀の
ための日干しレンガづくり
に取り組む。



土は最初はどうしても手で練りたくなる。



土練り作業は設備棟脇の空きスペースで。チュニ
ジアからの留学生 Fatima も参加した。

左上から：まだ乾いていない日干しレンガを運ぶ。震災で壊れた塀を補修したコンクリート壁に積んでいく。

日干しレンガは水に浸し、ゆるい粘土状に戻した泥糊で相互につなぐ。

右下：加工しない自然石を使う野面積みを教えて下さる松尾眞次さん(故人)。石の面の捉え方を学ぶ。



『峠の茶屋』づくりの現場には、地域のお年寄りや子どもたちがやってきて、世代を越えたさまざまな交流が自然発生した。松尾眞次さん(故人)には石の野面積みや縄編みを教えていただいた。公共に開かれたものづくりの場で地域に眠る古老の知恵が掘り起こされ、われわれや子どもたちに伝わる。ものづくりに関わる知恵・技術・素材という「芸術資源」をオープンに共有・循環させるといふ、「つちのいえ」の中核をなす思想がここで育まれた。



左：解体された民家の梁を彫って梯子をつくる。
右：地域の子どもたちが作業に「乱入」する



左：放置竹林から入手した竹を割って、初めて竹木舞をつくる。中心には窓を設ける。
右：現場で土とワラを混ぜて練った。子どもが土塊をつぶしてくれる。



荒壁は原則として内側から土を塗っていき、はみ出しを活かして外側から塗る土とつなぎ合わせる。初めての試みだったため、土の絡みが弱く、のち一部に土落ちが発生した。土の質、竹木舞の間隔、縄巻きの密度などに課題が残った。

左：円窓の縁を処理する。
右：円窓の真正面に九社神社の石燈籠が見えるようにした。





峠の茶屋



茶屋の屋根テラスからみた大蔵家の店先と道の眺め。
柱に使ったイチヨウの木は生きていて、若葉が芽吹いた。



取り壊された民家の梁を彫ってつくったアフリカ風の柱階段を上り、にじり口から屋根テラスに出ると、大山崎から続く柿街道と峠らしい風景の眺めを楽しむことができる。

峠の茶屋 お披露目茶会

2009年4月19日



完成を記念して、近所の方々を招き、お披露目茶会を開催した。



峠の茶屋制作は、2008年10月から自由テーマ研究*という授業になり、学生参加者も増えた。

お披露目会では大枝アートプロジェクト参加者でもあった音楽学部学生・照屋夏樹らによる三味線演奏が屋根テラスの上で行われた。



峠の茶屋は、実際にお茶を出すわけではなかったが、バスの待合いやちょっとした一服場所に使われた。お盆には近所の人たちを招いて映画会を開催した。



峠の茶屋 映画会

上映したのは『千代のお迎え』（監督：馬場マサノリ 2005年）。
親密に交流していた大原野の大工・大五さんが落ち武者役で出演している。

大藪家 最後の地藏盆

2009年8月22日

大藪家は、この地に300年近く前からあり、現在は柿や筍を農園を営んでおられるが、昔は酒の蔵元だった。屋敷の石垣の北側に小さな祠があり、そこに北向きに地藏が祀られていた。酒屋の守り神で、子供の病気に霊験あらたかとしてご近所の信仰も厚く、大藪家では代々この地藏尊のお護りをしてこられた。毎年夏の地藏盆のとき、ご主人が祠から地藏尊を抱えて屋敷内に移し、広縁に祀る。このときだけ北向き地藏が南向きになる。

母屋の取壊しが翌年に迫り、2009年8月22日、大藪家最後の地藏盆が行われた。大枝の深い闇に子供たちの歓声がこだまする情景は、切なく夢幻的だった。



北向き地藏にお参りする大藪ご一家。



虚空への階段

山口 哲史

2008 彫刻専攻卒業

2013 個展(トアロード画廊 / 神戸) 2013~2020

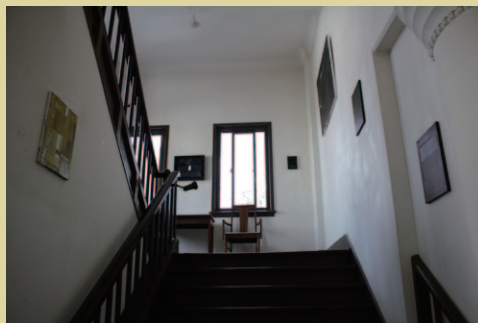
2018 ACT大賞 最優秀賞
企画展『虚実の彼方へ』(The Art complex Center/東京)

峠の茶屋の立ち上げに携わったのは、今から12年前の事。私にとって峠の茶屋は、学内では学べない、新たな表現の可能性を探るための秘密基地のような存在であった。当時、私は彫刻専攻で、石や木などの自然素材に向き合う日々の傍ら、その延長として、土や建築への関心から峠の茶屋作りに参加したように思う。道路拡幅のため竹林の斜面を崩していた現場から土を調達し、幾つもの土煉瓦を作り、塀を立ち上げたり、格子状に組んだ竹に、隅々まで土を入念に練り込んでいったりした。その過程は非常に興味深く、土を建材として扱うための知識や技術はもちろん、素材を購入して調達するのではなく、身近に遍在する素材を活かす術をも学ぶ貴重な機会となった。

特に、峠の茶屋の二階へと上り、空を望むための階段を、一本の木材から無我夢中に彫ったことを鮮明に覚えている。その形状は、アフリカのドゴン族の階段やブランクーシの無限柱のようであったと記憶している。果てしなく広がる空《虚空》との同化を希求する当時の自分自身を、階段を彫刻するという行為に投影していたのかもしれない。この経験は因らずも、現在の制作活動に大きく影響を与えている。

現在は、実空間から絵画空間へと関心は移り、《虚空》を主題に据えて日々制作に取り組んでいる。無限に広がる余白の中で、画面上で生起する現象との対話を手掛かりに、虚空と同化する《間合い》を探求している。

トアロード画廊という、空へと昇る螺旋階段。願わくば、螺旋階段の壁面に掛けた絵の中で、無限の虚空に通ずる窓を開きたい。



トアロード画廊(神戸市)での個展風景(2020年)

再生

富元秀俊

つちのいえは色々な再生の繰り返しでした。

つちのいえの制作が始まる前の話をしたいと思います。

つちのいえは2008年に井上明彦先生と5名のメンバーと共に峠の茶屋を制作することからスタートしました。最初に行った再生は、「自由テーマ研究」というカリキュラムに実技主体のつちのいえを組み込んでもらう事でした。これによって学生はつちのいえに打ち込んだ分だけ単位を貰えるようになり、活動の土台となりました。

カリキュラム的な土台を整えつつ始まった峠の茶屋制作は、江戸時代から続く土堀や家屋を持つ近隣の大藪家が高速道路建設によって解体となる前の期間、この土堀を延長して茶屋を作ろうというコンセプト。大枝地域の工事現場から譲り受けた赤土を素材として日干し煉瓦を積み上げて見晴らしの良い茶屋を建設しました。

次に学内の廃れた花壇を再生して、現在も続くつちのいえを作り始めます。2010年には解体の時期が来た峠の茶屋や大藪家の土堀を素材として救出し、つちのいえとして再生するコンセプトが加わりました。

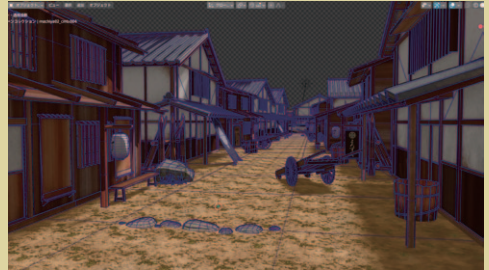
ここまでがつちのいえの初期の話です。江戸土堀の再生が母体となったつちのいえは2023年の京都芸大移転に伴って活動継続が困難となりますが、いつかまた再生の運命を迎える事と想像が膨らみます。

卒業後の歩み:

日本画家、ヤマハ発動機株式会社/ヤマハコミュニケーションズプラザ常設展示、株式会社吉祥にて日本画材料の製造開発に従事等の後、現在は合同会社DMM.com VR研究室所属3DCGアーティスト

最後に、卒業後つちのいえでの学びが役に立ったのかという個人的には大いに助けられた事が多く、特に現職の合同会社DMM.comVR研究室ではVR技術の研究開発を行っています。VRゲーム「BOW MAN」では江戸時代の街を3DCGで制作する中で、つちのいえでの手触りの記憶を頼りに開発に臨みました。

芸大の専攻に分類されない歴史と技術の学びはその後も繋がっています。



3DCGによるVRゲームの一場面

手の跡が残るもの

なかおかようこ

2008～2011年参加

2011年大学院漆工専攻修了
大学院卒業後、アパレル会社
でPRとして勤務。退職後、漆
工芸天下香仙工房にて蒔絵の
弟子入り。その後、蒔絵の修
復技法を習うため、更谷富造
に師事。現在は、金継ぎの仕
事を中心に直しの仕事をして
いる

最近のこの辺りでは、十年に一度の『どんぐり、椎の実の凶作』の煽りを受け、里に熊が降りてきて騒がしかった。雪が降り始め、熊も冬眠することができたのか、ぱたっとその話題は止んだ。ご縁があり、白山連峰に連なる裾野に住むようになってから、『自然』というものと『人の世界』というものの境界線が、このように身近になり、さらに目を凝らすことが増えた。

最初に自分がものを作ることに対して、『自然』と『人工物』の境界線の淵をうろうろしたのだと気がつけたのは、間違いなくこのつちのいえに関わらせていただいたおかげだ。私が参加した時には、すでに大枝の土蔵は改修がだいぶ進んでおり、左官の作業辺りから一緒に手を動かすこととなった。さらにその派生の『みどりの停留所』の展示に参加し、草編みの道を作った。

アースポイントというものをご存知だろうか。工事の道標となる杭で、わかりやすいように頭の部分が赤く塗られている。道路建設予定地を1人でフィールドワークしている時に、地面に体を伏せて視線を下げた時に、このアースポイントが連なり、人の営みを横断する道が立体的に立ち上がって見えた。昔からの山に続く参道も、丹念に育てている方の顔が見える柿畑も、豊かな土壁も、野面積みの石壁も。全てが横断される道の中。建設予定の地図上では読み解けない地形の起伏、豊かな人の日常。だったら私はその反対をしながら、この土地の記憶を編み込む道を作ろうと思った。地面の草が生えているなりに編み込む。阻むものがあれば、迂回する。切られる予定の柿畑で山口さんのインスタレーションの後、私の草の道を参加者で歩いて、『土地送り』をした。

何かの『記憶』を留める装置としての『芸術』。そうしたことに出会えたその時のメンバーと峠の茶屋を作ることは、大藪家の土壁の記憶を残すことから始まり、いまでも続くつちのいえへと深化していった。

小さい時から秘密基地を作ることが大好きだった。家の中なら押入れ、外階段の下の空間、雑木林の中、葎の生い茂るところを結んだ中。友達と壁を作り、外界と遮断し、中で自分たちの宝だと思ふもの並べたり、見せたりする。光る泥団子や書いたイラスト。つちのいえは私にとってその秘密基地の延長だったと思う。峠の茶屋を作っている時、私たちは土壁や技法や素材や携わってくださる人たちの手のあとがキラキラして見えた。竹をとり、藁を発酵させ土に漉き込み固めて、Adobeの元となった干し煉瓦を作り、階段を作り、版築で壁を建て、再生と循環ということに感動し。最終的につちのいえは、様々な工法が取り入れられ、

大枝の伝統的工法を残すというよりも、多国籍でおおらかなものとなった。初期メンバーの5人と時折訪れる客人と、この秘密基地を濃密に共有していった。その中では、感動したこと、美しいと思ったことを素直に伝え合え、感性の小石を見せ合いっこするような感覚だった。先生や生徒、先輩や後輩、京芸か他校か、全部を取っ払って存在する時間が流れていた。

大学を卒業し、この特殊な『村文化』を出たあとは、その感性を研ぎ澄ませながら生きていくことは非常に辛いときもあった。自分の握っていた感性の小石が、「ただの石だ」と周りの手ではたき落とされる前に、自らそっと手放してしまう方が楽だと気がついてしまう日々も多かった。

その中で、『修復』にもう一度巡り合った時に、非常に落ち着くものがあった。何か0から自分が表現をするというよりも、そこにあるものに寄り添ってみる。そのものの物語を掬い出して、提示してみました、というくらいのバランスが自分には向いているのだということ、歳を重ねるごとにさらにはっきりとしてきた。

工芸は『自然物』と『人工物』の間に技術が入り、作品となる。

土=自然物、土を握る=人工物、土を焼く=作品

人と自然の境界線、どう自然を切り取り整えるのか。私がつちのいえに惹かれるのは、頭の中の概念ではなく、土をとり、藁を切り、発酵させて粘りを出し、型に入れて固めて、どべで積み上げ、そうした行為の中から、人間も自然の一部でもあり、人間が扱える自然には限界があるということを学び続けられるからだろう。

最近知り得たばかりの知識で恐縮だが、熊騒動でわかってきたことは、私たちが「自然だ」と思っているものも人間の手が入っていたということ。それが生態系を壊していった過程。戦後、未来を信じて日本中に杉林を作った人々の想い。杉林が生態系を狂わしてしまったこと。日本は豊かな『自然』がある国だと信じていたその危うさ。

自然だから美しい、人工物だから美しくないというものでもなく、私は人の手の跡が残るものに愛おしさを感じる。そこには物語があるから。

境界は曖昧であるということ、歴然としてあること、悲しみではなく受容するものであるということ。そうしたことをぐるぐるとずっと卒業後も感じて考えることになったつちのいえにも、それを長い目で大切に育ててくださった恩師にもそこで出会えた人、もの、事象の全てに感謝しかない。ありがとうございました。



土地の整備のために伐採した桜の枝
はのちに卒業制作の作品となった。

「峠の茶屋」「つちのいえ」のカリキュラム上の位置づけ

2008年8～9月	授業外の自主プロジェクト
2008年10月～2011年3月	自由テーマ研究
2011年4月以降～	新テーマ演習

「峠の茶屋」は、小清水漸名誉教授が1990年代に学内で行われていたプロジェクト「和船をつくろう」(*)を引き継ぐ側面があった。和船を実際につくることで日本の木造技術の粋を学ぶ専攻横断型の実習授業として始まったが、まもなく授業としての枠は消滅し、自主参加型のプロジェクトとなった(井上明彦も参加した)。

「峠の茶屋」の制作も、竹小舞や日干しレンガづくり、左官、石積みなど、「美術」から伝統技術を排する一般の美術大学のカリキュラムでは学べない領域も多く、教育的意義も高いと思われた。

場所が学外であることに加え、参加したい学生が専攻の授業から離れることを制度的に保証し、かつ他の学生にも参加の機会を開くため、2008年後期から、「自由テーマ研究」という枠で授業化することにした。授業化すれば作業時間も制約され、ただ単位ほしさに参加する学生も出て、作業の質と量を下げる懸念もあったが、公的な授業とすることで得られる広がりの方を重視した。

2009年度、学科教育改革の一環として、それまで学科教員によるゼミ形式の座学系授業だった「テーマ演習」に、自由テーマ研究を融合させ、実技と学科各領域の横断と実験・実習も可能とする改革を提案し、さまざまな検討を経て、2011年度から新しいテーマ演習が始まった。

新テーマ演習は、1970年の大学改革案でカリキュラムの中心に置かれていた「研究テーマ」をわずかながら引き継ぐ性格のものともいえ、単に教育だけでなく共同研究にも

発展する可能性を持ち、以後、総合基礎実技と並んで、京都芸大独自の分野横断的研究教育の柱となっていく。「つちのいえ」は、2011年度からこの新しいテーマ演習に位置づけられた。

自由テーマ研究：

選択科目(2単位)。学生、教員の自由で複合的な参加のもとに行われる授業で、自由に幅広いテーマによる研究を行う。テーマの提案は教員・学生いずれからでも可能とし、学科教員と実技教員各1名以上の参加と、3回生以上の学生5名以上の参加を成立要件とする。大学院生も受講可能とし、修了単位として認める。毎年後期から開講し、翌年前期も継続可能とする(2009年度『履修要項』から)。

旧テーマ演習：

2単位必修。学科3系列(芸術文化・芸術科学・芸術学美術史)の関わりにおいて、学科教員の指導のもと、討論と研究発表を行う。毎週木曜午後に開講。(2010年度まで)

新テーマ演習：

2単位必修。テーマの提案は教員・学生いずれからでも可能とし、学科ないし実技教員1名以上の参加と、3回生以上(大学院含む)の学生5名以上の参加を成立要件とする。同一科目を重複履修でき、最高8単位まで履修できる。毎週木曜午後に開講。(2011年度以降)



*1990年代半ばに彫刻棟の一角で行われていた「和船をつくろう」プロジェクト